Ⅱ．シンポジウム

一般社団法人 日本計画行政学会 関西支部 2019 年度 研究大会　－シンポジウム－

「地方におけるライフスタイルのシフト」

～ 人生 100 年時代の働き方、暮らし方 ～

日　時：2019 年 6 月 29 日（土）13：30～17：00
場　所：大阪市立大学　文化交流センター 大ホール（大阪駅前第 2 ビル 6 階）

（文中敬称略）

■基調講演

「半農半 X 再論～ライフスタイル・シフトへのいざない」

半農半 X 研究所　代表
塩見　直紀　氏

● はじめに

「半農半 X」ということばが誕生して 25 年。本日は改めて、この間を振り返ってみたいと思っています。本日は「ライフスタイル・シフトへのいざない」というテーマが掲げられていますが、そこまで深められるかわかりませんが。よろしくお願い申し上げます。

一昨日から台風 3 号の影響がありました。私も田んぼで米作りおこなっているので雨を楽しみにしていましたが、意外と降雨量は少なく、もう少し欲しいと思ったほどです。台風は今年もいくつか来ると思いますが、被害の少ないことを祈ります。いま、世界は不透明。この先どうなるかわかりません。その中で北極星や灯台の灯りが分かればよいのですが、それも分からないような時代です。今まさに大阪では G20 でいろいろな話をされていると思いますが、世界はいま、歩むべき向性を探っているのではないかと思います。羅針盤はあるけど、それも壊れているような世の中ではないかと思っています。

＜この時代をどう生きるか＞

大学卒業後の 30 年間で私が目指してきたのは、「この時代をどう生きるか」ということ、どう生きるか、どう暮らすか、どう働くかということでした。

私は平成元年に大学を卒業し、フェリシモという会社に入りましたが、オフィスは大阪駅前第 3 ビルの 29 階にありました。今、京都綾部では平たい地面の 1 階生活です。考えてみると、29 階などという高層階の怖いところによくいたものだと思います。フェリシモを卒業したのが平成 10 年、33 歳の時で、故郷の綾部へ U ターンして今年で 20 年になります。30 年の時を経て、大阪駅前第 2 ビルにやって来たこと、不思議に思っています。

私は 33 歳の時に故郷の綾部に U ターンをしましたが、28 歳の時にはすでにそれを決めていました。33 歳で人生の再出発を決めた理由の一つは、内村鑑三の「我々は何をこの世に遺して逝こうか」ということばに触れたことでした。

今「レガシー」ということばがよく言われますが、何かを遺すのであれば、負の遺産を遺さない生き方をしたいと考えるようになりました。

内村鑑三は明治 27 年に行った講演で、この世に遺すものとして「金か。事業か。思想か。」と自問し、誰でも遺せるのは高尚なる人生だと言っていますが、高尚なる人生は別として、前の 3 択で考えるならば、「金」は遺す自信がありませんし、「事業」も遺せる自信がありません。そうなると遺せるのは「思想」しかありません。中学校や高校で授業をする時にこの話をしますと、「金を遺す」に手を挙げる人はなかなかいません。それは謙虚な民だからかも知れません。

そのような思いから、33 歳で会社を卒業し、当時、既に結婚していて子どもは 2 歳くらいでしたが、一家で綾部に戻りました。

＜「半農半 X」誕生の時代背景と意味＞

「半農半 X」誕生の時代背景を見ると、1989 年にベルリンの壁が崩壊し、株価が頂点になりました。1992 年は地球サミットがリオで開催されましたが、フェリシモは会社を挙げて地球サミットを応援する活動を行っていました。当時の会長はブラジルのリオへ行っています。1993 年に「平成の米騒動」があり、それから 1995 年に阪神大震災、地下鉄サリン事件が起きるまでくらいの間に「半農半 X」ということばが誕生しました。当時、私は 28～29 歳でした。

「半農半 X」のことばが誕生して約 25 年。その最大の意味は方向性を提示したことではないかと自分なりに分析しています。

例えば、今は富山県と同じくらいの遊休耕作放棄地があると言われていますが、それを少し耕すというような話ではなく、持続可能なこういう生き方があると方向性を提案したことが「半農半 X」の一番の意味だったと思っています。この間、いろいろなことばが生まれています。今日の会場がらみでいえば、大阪市立大学は「創造都市」「創造農村」。「人生 100 年時代」「兼業時代」やドラッカーの「パラレルキャリア」、山崎亮さんの「縮充」等。今まで私が取り組んできたことと時代の流れがいい感じでリンクし始めていることを実感しています。

＜個人的ライフスタイルからの拡大＞

この 25 年間の変化を見てみましょう。最初は「半農半 X は塩見さんが考える一ライフスタイルで個人的なもの」と捉えられていました。あらゆる問題は個人の気づきから始まり、段々と「見える化」されて政策の領域へ至ると言われます。ライフスタイルがだんだん、政策の対象、領域へ至っている。今回、この研究会に呼んでいただき、「政策の先」もあるのかもと思いました。「さらなる時代へ」を皆さんと一緒に考えられたらよいと思っています。

例えば、農業の世界で「農の多様な担い手」が必要であると言われています。「半農半 X」は、島根などでは政策化されていますし、東アジアへも越境してコンセプトが広がっています。また「半 X 半 IT」やまちづくりに応用して活かされていますので、それらを受けて、私は、これからの国や世界のビジョンを提案したいと思っています。

「半農半 X」コンセプトからの派生で他の分野に応用を考えるようになりました。たとえば、観光の未来にも提案ができると思っています。今は「観光公害」ということばがあるように、観光の未来をどのように考えるかという課題があります。私は新しい観光、旅の提案として、「天職観光」をあげたいと思います。そもそも人は未来や人生のヒント、自分の天職のヒントを探す旅をしてきました。これからもきっとするだろうと思います。例えば、香港から綾部に来た若いカップルに「あなたたちの旅は天職観光か」と訊くと「そうです」と答えます。美味しいものは食べたいけれど、何か未来の人生の

ヒントになるものを探して、中国の方も世界の方も旅をされているのではないかと思います。

国が今後も輝くためには、国民、一人ひとりや地域のよさ、魅力を表現すること、「X の見える化」が重要だと考えます。内村鑑三が『日本の天職』というエッセイを書いていますが、その辺りから「自分の住んでいる綾部の天職は何か」というようなことを考えるようになり、人に「X」があるように地域にも「X」があるのではないか。現在、「見える化」「可視化」に取り組んでいます。「人生探求都市」というのが私の考える綾部のビジョンです。みんなの「X」を応援するまちをつくっていきたいと思います。

本日は、改めて「半農半 X」の話をさせていただいて、その後、そこから広がった新たなコンセプト、それを基に考えられる地域づくりのこと、新しいライフスタイル等について、お話できればと思います。

●プロフィール紹介と「半農半 X」の創出

私は 1965 年に京都府綾部市で生まれ、もう結構いい歳になりました。「半農半 X」は今やいい意味で独り歩きをします。普通に使われることばになり、「半農半Xしてます」と動詞として使われることが多くなったように思います。

現在、私は京都市立芸術大学大学院の構想設計＝メディア・アート領域に在籍し、「人と地域のXの可視化」を研究しています。一方、3 年前にできた福知山公立大学の地域経営学部では週 3 勤務で授業やゼミを担当しています。

私はフェリシモ時代に読んでいた本の中で「新概念創出能力」ということばに出会い、それ以来、コンセプトを作れる力が大事だと考えてきました。アメリカでも「社長はビジョンをつくれるが、部下はつくれない」という問題が挙がっているようですが、それを今、ゼミのテーマでも取り上げています。目指したいのは、ことばによるデザインです。農業の世界には福岡正信や川口由一さんなどの著名な方がおられるので、私は農の世界で有名になることは目指していなくて、「ことばで世界をデザインする」ということを志しています。

私の住んでいる村は、信号機のある場所まで 3～4km 離れている信号のない村です。昨年の豪雨で山が崩れ、そこにあった寺が被害を受けてしまったので、今、寺の移築という問題を抱えています。寺の移転に関して、私は公民館内に入れてはどうかと思っていますが、新築が良いという意見もあり、議論中です。

Uターンして先祖の土地を守る立場ですが、農作業をする時は胸のポケットにはペンを入れ、アイデアを書き留めるという暮らしをしています。農は五感を刺激して、インスピレーションを与えてくれます。田んぼは手植え、手刈り、天日干し。そうした風景と農地を守っています。

今日はそんな綾部から来ましたが、京都駅まで特急で 1 時間くらいのところに綾部はあります。我が家は兼業農家で、祖父は養蚕の指導者、父は教員でした。母は 42 歳という若さで亡くなったので、自分の中では「42 歳で死んでも構わないような人生を送る」というのが 20 代、30 代のテーマとなりました。

全校生徒 60 名の大変小さな小学校で学びました。子どもの頃は昆虫少年でした。「山の神さま」という行事があり、毎年、子どもたちが山の神さまのために藁と竹で家を造って備えていました。特定の宗教は持っていませんが、アニミズム精神が大事だと思っています。

子どもの頃は山菜のフキを採って、子どもたちはそれを花火代に充てていました。今、考えると里山ビジネスをしていたわけです。これはとても重要だったと思います。この地域は漢方の素材となる山野草がたくさん採れるので、我々の上の世代はそれを漢方屋に卸す等、かなり上級ビジネスをしていました。今、子どもたちはそのようなことは何もしていません。

＜「半農半 X」誕生の地・綾部＞

人口約３万３千人の綾部市について紹介しますと、一番の特徴は民衆宗教「大本」が誕生したまちであることです。それから、グンゼ創業の地であること。「国に国是があるように、郡には郡是、村には村是がいる」。前田正名が綾部に来て、創業者となる波多野鶴吉をインスパイア。当時、綾部は何鹿（いかるが）郡という地名です。「郡是（グンゼ）製糸」という会社が誕生しました。また、合気道発祥の地でもあり、世界連邦都市を最初にした宣言した都市でもあります。その他、アンネ・フランクにちなむ「アンネのバラ」の育苗地など、いろいろとあります。綾部の一番の悩みは、大学進学の若者が丸ごと出て行ってしまう（＝大学に通えない距離にある）ということでしょうか。

そんな綾部ですが、「綾部の型（かた）」は何かと考えますと、「ものづくり」×「こころ」×「里山・平和」の３つが挙げられると思います。私は綾部が目指すべきは「人生探求都市」であると考えています。そのことばを使い続け、そうした方向になるように仕向けるのが私の仕事ではないかと思っています。日本政策投資銀行出身の山崎善也市長も「人生探求」という言葉を時々使ってくださいます。

『驚きの地方創生「京都・あやべスタイル」』（扶桑社新書）という１冊まるごと綾部本があります。「上場企業と『半農半 X』が共存する魅力」という素晴らしい副題がついています。小さなまちのことが１冊の本になっている。日本のすべての市町村版の本ができる時代が来ればよいのではないかと思います。綾部には、綾部にまつわる３つの小説(『邪宗門』『妍蟲記』『黄金の天馬』)があります。「フォークの神様」と言われた歌手の岡林信康さんが全盛期、雲隠れして４年ほど綾部で田舎暮らしをしていました。講談社から『岡林信康の村日記』という本が出ていて、その本は自己探求がしっかりなされているので、今読んでも新しい本です。

余談ですが、私が生まれた翌年の昭和 41 年に有名な『生きがいについて』（神谷美恵子著）という本と、大本教の関係者による『生きがいの探求』（出口日出麿著）という、共に「生きがい」ということばのついた２冊の名著が出版されました。その頃から日本人の「生きがいブーム」が起こっていったようですが、私はこの「生きがい」をコンセプトにしたまちづくりや観光を目指すべきではないかと考えています。観光は綾部の弱い部分ですが、そういう中で普通の観光をするのは無理だと思うので、心の観光（天職観光）を目指すべきだと思っています。

＜「半農半 X」が生まれるまで＞

大学では農業ではなく、日本古代史を学び、父が教員だったので教員免許も取りました。その後、綾部市役所の試験を受けました。私が綾部市役所で働いていればこの場に立つことはなく、皆さんとお会いすることもなかったので、今から思えばその試験に落ちて良かったと思います。しかし、計画行政という形でクロスするのも因縁かもしれません。

そして、平成元年に株式会社フェリシモに入り、地球環境問題に出合うことになります。環境問題、持続可能な生き方、暮らし方は私の 20 代のテーマであり、同時に「どのように生きるのか＝天職問題」もメインテーマとなっています。この２つの問題を大きく感じたところから「半農半 X」が誕生しました。テーマが環境問題だけだったら「X」の部分はなかったかも知れません。そこから「半農半 X」ということばが誕生して、私の“自分探し”は終了したと思っています。

周囲には、農業に関心を持って奈良の川口由一のところへ自然農を学びに行く人など、同じ悩みを持つ人が多かったので、「半農半 X」を伝

えることが仕事になっていきました。

「半農半 X」については、なぜ「X」と表現したのかというと、私には何も得意なこと、大好きなことがなかったからです。今は講演やワークショップ、また執筆などさせていただいていますが、このような私にも何か、ライフワークや生きがい、天命のようなものがあるだろうと考えて、未知なるものとして「X」を当てはめました。数学の問題を解くとき、Xを入れて考えるのと同じです。「半農半 X」ということばは、誰かのためやマーケティング用語のためにつくったのではなく、自分自身を救うための言葉だったということも特徴の 1 つかも知れないと思っています。

「半農半 X」という言葉を創出した原風景・背景を紹介しますと、実家は父が教員で兼業農家。一家で稲刈りをしたり、あぜで昼ご飯を摂ったりしていました。我々よりも上の世代は子どもも労働力として扱われることが多く、「農業は嫌だ」という人も多いようですが、我々の時代はかなり緩くなっていたと思います。このような田舎で生まれた者が都会に出て働くなかで誕生したことばが「半農半 X」だったわけです。

それ以外に大きな影響を受けたのが「持続可能性」「後世」「7 世代後」「将来世代」等の言葉です。まだ生まれていない世代のことを誰が配慮するのか。環境倫理や世代間公平の話です。

「創造性」にも影響を受けていますが、これはフェリシモに芸大出身者が多く、「彼らはなぜこんなにアイデアが出せるのか」とショックを受けたことから、どうすれば「創造性」を開発できるのかということがテーマになりました。

それから 1991 年、地球サミットの前年に偶然、アメリカの『ホールアースカタログ』に影響を受けていると思われる雑誌（「地球グッズカタログ」）の中で「ソーシャルデザイン」ということばに出会い、自分がやりたいのはソーシャルデザインだと思いました。そこで、フェリシモの社長に頼んで「ソーシャルデザインルーム」という 1 人だけの部署をつくっていただきました。自分でもなかなか身勝手な要望だったと思いますが、すでに「ビジネスデザインルーム」があったので、それならソーシャルデザインルームもあるべきではないかという発想でした。このように、91 年頃には「ソーシャルデザイン」ということばに出合っています。この 5～10 年ほど日本でもよくつかわれるようになりました。

●「半農半 X」の拡大と展開

＜「半農半 X」の海外への拡大＞

このようにして様々なことばに出会い、「半農半 X」という言葉を創出したわけですが、最初は半農半Xを本にしようという発想はありませんでした。たまたま農文協の『現代農業』の増刊号で『定年帰農』という本が 1998 年ころ、ベストセラーになり、「若い人たちにもそのような傾向がある」ということで 2002 年、『青年帰農』が編まれることになり、その時に甲斐編集長から「半農半 X」について 6,000 字～7,000 字の原稿の依頼がありました。それによって初めて原稿料というものをいただきました。

それがデビュー作ですが、これを手に取った若い人が日経新聞の記者に「塩見さんに会うべきだ」という話を複数されたのがきっかけとなり、日経新聞に「半農半 X」の大きな記事が掲載され、東京のソニー・マガジンズから商業出版の話をいただくことになり、2003 年に『半農半Xという生き方』という本が出版されました。

全く無名の人間が書いた本でしたが、直後からメールや手紙が届くようになり、綾部への訪問も始まりました。我が家に置手紙があったり、綾部に移住する人がいたり、「うちの息子が家出をしたが、そちらへ行っていないか」という東京の知らないお母さんから電話があったり、「あなたの本を読んで会社を辞めました」「旅に出ました」「新たな資格を取りました」「畑、はじめ

ました」等、いろいろな声が届くようになりました。

➢ **台湾版の出版**

大阪で拙著を読んだ台湾出身の若い方が台湾に本を持ち込まれ、台湾版『半農半 X 的生活』が出版され、台湾でも広がっていきました。「半農半 X」は口コミで広がっていったのです。台湾版で嬉しかったのは、「半農半 X」ということばがそのまま表記されたことです。翻訳本では違う表現になってしまうことがよくありますが、さすがに漢字文化圏はそのままの表記になりました。当時、フェリシモの同僚だった中国人スタッフから「半農半 X は中国でも通じる」と聞いていたのです。

台湾版には編集者により、「順従自然・実践天賦」という副題が付けられました。自然に従順で、与えられた天賦の才を実践するという意味ですが、漢字 8 文字で見事に生き方を表していると思います。

以来、台湾にも講演に何度も行かせてもらうようになりました。台湾も日本と同じように地方への移住ブームがあって、地方に民宿などもできているようです。台湾にも地方創生の動きがあるということで、「半農半 X」と同じような考え方を持った若い人が地方に移り住んで新しい仕事をつくろうとしているのを応援したいと思います。

➢ **中国版の出版**

待望の中国版も出ました。コピーでも無料ダウンロードでも構わないので、中国人全員に読んでいただきたいくらいだと思っています。本の帯に「環境問題×食品安全」と書いてあり、コンセプトがひろがる背景も日本版と変わらないような感じです。いま、本を読んだ中国の方が綾部にやって来る時代が来ています。

ある中国人の経営者は、子育て世代に安心な野菜を作ってもらいたいという新たな「X」を発見されて、市民農園を開設しました。食品を危ないと思いながら食べるか、自分でつくるか、高い有機農産物を買うか、はたまた国を出るか。土地の私有はないとしても、自分で安心な食物を作るのが一番信頼できるのではないかという考えは、自然なものだという分析もあります。

➢ **韓国版の出版**

おかげさまで韓国版も出ました。漢字文化圏はやはり素晴らしいと思います。

➢ **英語圏への拡大**

では、英語圏ではどうなのでしょうか。日本から伝わった「半農半 X」は中国人の研究者によってイギリスの方に伝わりました。「シューマッハ・カレッジ」で学ぶ日本人から聞いた話です。いまの私の悩みは、「半農半 X」を英語でどう表現するかということです。この難問がまだ解決できていません。half agriculture とか half farming, half X など暫定的な訳はありますが、固定の訳はなく、私もネイティブではないので決められません。

余談ですが、「半農半 X」は日本の、特に農村発のコンセプトとして海外に広まった稀な例ではないかと思います。例えば、福岡正信は海外で有名ですが、自然農法で知られており、「わら一本の革命(One-straw Revolution)」は中国人も読んでいます。また CSA は提携（teikei）から来ています。古野隆雄の合鴨農法も英訳され、評価されていますが、日本初の農的なライフスタイルが海外に広がったのは、珍しいことだと思っています。

＜「半農半 X」の展開＞

歴史を振り返ると「半農半漁」という日本の伝統的なライフスタイルがありました。これを最初に言ったのが誰なのか、文献的には分かりませんが、同様に武士を表す「半農半士」や、医者を表す「半農半医」ということばもありました。島崎藤村は大正 15 年の小説『嵐』の中

で「半農半画家」ということばを使っており、その頃にはすでにそのようなことばがあったことが分かります。宮沢賢治も「半農半商」ということばを使って講演をしていますし、宮大工の西岡常一も「半農半工」ということばを使っています。「半農半著」という作家・翻訳家の星川淳さん（屋久島在住）のことばも知り、「半農半〇〇」のような生き方、暮らし方がこれからの時代はふさわしいのではないかと思ったわけですが、私にはその〇〇を埋めるもの（特技や大好きなこと）がなかったので未知数としてのXを入れた「半農半X」になったのでした。

最近は「半農半芸」や、ソーラーシェアリングの「半農半電」等、いろいろと違う意味での展開があり、丹波市では「半農半公」と表現しています。さらに林業系では「半林半X」ということばも使われ始めています。農村部では地方議員の成り手が少ないことから「半議員半X」で兼業緩和をすればよいのではないかという議論が行われていますし、今年、東京新聞には「半介護半X」が大きな記事なりました。

徳島・美波の IT 企業サイファー・テックは「半 X 半 IT」をテーマに掲げて、良い人材を集めることができるようになり、本社を美波町に戻されましたが、それが今年「波乗りオフィスへようこそ」というタイトルで映画化されました。映画の中で、私の文庫本が小道具として登場します。

「半介半X」は、まだ書籍化されていませんが、これからの介護について半介護半Xの生き方を目指す若い人たちがたくさん生まれるように、早く本になればと思います。

このように「半農半X」のコンセプトには、見た人が完成させる、アレンジがしやすい等の特徴があり、大げさに言えば宮沢賢治の「永久の未完成これ完成である」ということばに類するものではないかと思います。

「半農半X」の「農」はサバイバル時代への対応だと思っていて、今後の人口 100 億人時代や、資源争奪のようなことも想定されています。一方で AI 時代への対応については、それぞれが未来をどのようにつくっていくのかというところで「X」の部分が人工知能時代対応になっているのではないかと思います。

ある本の中で「逆風半帆」ということばに出会いました。我々は「順風満帆」ということばは学んできましたが、ヨットに乗る人は逆風の時に満帆では帆が折れるし、ターンができないので「逆風半帆」は知っているようです。「半」ということばはどうしても、中途半端の「半」と解釈しがちですが、「半」にはもっと深い意味があるのではないか。「半の思想」のようなものを取り戻す必要があるのではないかと思っています。

●「半農半X」の特徴と課題

＜「半農半X」の２大問題＞

「半農半 X」はまだ生まれて 25 年なので普遍性を語るには早いかも知れませんが、もしも普遍性があるとすれば、そこには２つの問題があると思われます。

1 つは、収入に関する問題です。例えば、北海道の熊の木彫りや鯖江の眼鏡などは農閑期にどう稼ぐのかというところから始まったものだといいます。また、産業革命後の生きづらさに関する問題もあります。100 年前から田園都市論ではそのようなことが言われていたと思いますが、この２つがいまクロスしている。それが現代ではないかと思います。

2 つ目は、人は何か食べないと生命をつなげないという問題。それから、人は食べ物さえあれば良いわけではなくて、「生きる意味」が必要だということです。ヴィクトル・フランクルの『夜と霧』などにはそのようなことが書かれています。よく「半林半Xではダメか」という質問がありますが、スギやヒノキを輪切りにして

フライパンで焼いて、ソースをかけて食べることができれば「半林半 X」でもよいと思いますが、生命の維持という観点からは「農」がとても重要ではないかと思っています。そういう意味で「半農半 X」のシンプルな理由がここにあります。

福岡の香春町は内閣府から資金を獲得し、それで「半農半 X」的なことを取り入れてきましたが、担当者は「我々のまちは農地も空き家も提供できますが、仕事は提供できません」と言っています。もちろん選ばなければ仕事はあると思いますが、若い人の就きたい仕事があるかどうか。ゆえに X をもつ人が来てくれたら農地や空き家は提供できる、と。香春町と同じような町は日本にたくさんあるのではないかと思っています。いまはパラレルキャリア、兼業の時代。いろいろと仕事を組み合わせて食べていく時代なのかもしれません。

＜「半農半 X」の条件＞

「半農半 X」は、面積も時間も条件を問いません。場所も都会、田舎は関係ありません。「X」はフルタイムでなくても構わないし、公務員でもベンチャーでも構わないのです。「X」のない人は周囲のサポートでもいい。「X」は 1 つでなくても、幾つでも構いません。

なぜ、このように条件が緩いのか。農業は敷居が高いと言われるので、敷居を低くして、「できない」という言い訳をさせないためです。「ベランダしかないから『農』ができない」等と言わせないために「鉢植えでも構わない」という形で、かなり敷居の低い設定にしています。

「半農半 X」の「農」に対する私の考え方は、人間中心主義を超えるもの、サバイバルへの対応、インスピレーションをもらえるもの、リスペクトすべきもの。いまは農 0%ではまずい時代だと思います。でも、農業 100%（専業農家）は自信がない。自分が農に 100%、力を注いでも、世界の問題が解決するわけではない。半農とは、0 でもなく、100 でもないという捉え方です。

＜「半農半 X」の特徴＞

紀伊国屋書店の POS データによると「半農半 X」本の読者層は 20 代～40 代の若い層。団塊の世代よりは若い世代は手に取ってくれたようです。やはり、そこには若い世代の環境意識のようなものがあるのかもしれません。子育て世代が読んでくれているということですから、これが地方の政策、つまり若い世代が欲しいというところにリンクするのだと思います。

「半農半 X」的な移住者を見ていて感じるのは、そうした方々が有する創造性、ソフトパワー、新しい価値ををつくることができる力です。これがいまとても重要なことではないかと考えています。

＜先人のことばに学び、未来を考える＞

漢字が伝わる以前の「やまとことば」の研究者に教えていただいたのですが、野菜の種（た・ね）ということばには 2 つの意味があって、「ね」は根源を表し、持続可能性や大地性を意味します。「た」はたかく、たくさんということで広がりを意味しています。確かに種を蒔けば根っこが生えて、大地から栄養を吸収し、大地にしっかりと根をはっていきます。芽を出し、そらに向かって伸びていき、種子を残していきます。

現代人はよく「根無し草」と言われます。しっかりとした根っこがないのです。そういう中で、本日の集まりは、その根っこをどのように考えるのかという問題と、さらに空に向かって創造性をどのように開花させるのか、新しい未来をどのようにつくるのか、人生 100 年時代をどのようにつくっていくのか、ということを考える場ではないかと思っています。

「詩をつくるより、田をつくれ」という諺が

あります。詩をつくるよりも田をつくるほうがいいという実利を優先するという考え方です。確かにそうなのですが、私にはすこし違和感がありました。そこで、この諺を 3 パターンに展開してみました。

1 つ目は「田をつくるより、詩をつくれ」。例えばアーティストであるなら、売れなくても構わないので魂の表現が重要であるという考え方です。

2 つ目は「田もつくるな、詩もつくるな」。田んぼはプロの農家に任せればいい、詩は谷川俊太郎さんのようなプロの詩人に任せればいいという考え方です。これは現代の考え方であり、危険な考え方かもしれないと思っています。

3 つ目は、前の 2 つの考え方に対して「田もつくろう、詩もつくろう」という、両方やればよいのではないかという考え方です。「21 世紀は詩の時代だ」と言う人もいる。「農の時代だ」と言う人もいる。私は「両方やればよいのではないか」と思うのです。そんなことを私は全国の講演会場で話しています。

山梨県でそんなお話をしたら、アンケートに「山梨県にそのようなまちがあります」と教えていただき、びっくりしました。山梨県笛吹市の旧八代町、今は合併でもうありませんが、旧八代町には「田も作り、詩も作ろう」という看板が今でも残存しています。有識者がつくる会議か何かで、うちの町は文芸も盛んだし、農業も盛んなので、両方とも励むまちにしましょうという合意があったのではないかと推測します。首長の哲学次第で、住民の思い次第で、このようなまちもつくることができるという事例ではないかと思っています。

「農」があればセーフティネットになり、安心ですが、若い世代には「エックス力」もとても重要ですと伝えています。

今の世の中を私は「散逸社会」と呼んでいます。大事なものが次第に散らばり、逸することになってしまう社会です。だからこそ、重要なのは「収斂」「結晶化（クリスタライズ）」ではないかと思っているわけです。

● 国家ビジョンから「まち A to Z」へ

＜1 人 1 研究所＞

そこで、私が考える国家ビジョンが「1 人 1 研究所社会」です。国家と付くと大げさですが、これからのビジョンとして、思い描いていることをお話します。来年 20 周年になる半農半 X 研究所を私は細々とやっています。一人ひとりがライフワークとして自分のテーマを探求する社会を目指すことを「1 人 1 研究所社会」と呼んでいます。そして、最後は PPK（ピンピンコロリ）で、できるだけ介護されることなく、大往生できればよいというのが私のビジョンです。

政治の世界で「成長戦略」ということばがよく使われるようになったころ、「半農半 X」的に成長戦略をどのように考えるのかという時に、生まれた考え方です。今後、ゆっくり世に出して行こうと考えているコンセプトです。究極の成長戦略とは何か。それはやはり国民の潜在能力の発揮ではないかと思うのです。「1 人 1 研究所」の考えは、例えば京都の堀川高校の探究科の授業や、京都大学の白眉プロジェクトのようなところにもリンクすると思います。

＜人生探求都市＞

とある仏教学者は「人生の三大目的」として「自己究明」「生死解決」「他者救済」を挙げていますが、「自己究明」は生涯行うものであり、「他者救済」は自分だけが救われればよいということではなく、他者に手を差し伸べるということです。この「自己究明」と「他者救済」を少しでもおこなう社会を目指すべきではないかと思います。

古代ローマのある詩人はローマが滅びた背景に権力者から無償で与えられた「パンとサー

カス」（＝食糧と娯楽）が市民を盲目にしたと警鐘を鳴らしましたが、誰も耳を傾けなかったといいます。観光の世界では旅人にパンとサーカスを提供すべきだという考え方もあるようで、間違えれば、危険な考え方になることを危惧します。本来、このようなものを与え過ぎるとまちが滅びてしまう。私は「パンとサーカス」の逆ができないかというのが私の考え方です。

そのような考え方を背景に、今提唱していきたいと考えているのが「天職観光（未来のヒント、天職のヒントに出会う旅）」という考え方です。これは新しい観光の姿です。私は今まで自らの天職のヒントを探す旅をしてきました。昨年の夏休みに夫婦で東北に行きましたが、これは自分の「X」のヒントになるようなところを巡る旅でした。そのような旅人の天職を応援し、応援する側もそれによって自分の天職を磨くことができる、そのようなまちがこれからは選ばれるのではないかと考えています。

つまり、目指しているのは「人生探求都市」であり、このようなまちをつくれないかと思っています。簡単につくれるわけではありませんが、1 つの方向性として提示したいと思います。

＜地域の「たからもの」を見える化する＞

➢ 資源の見つけ方ワークブック

最近、大学生や高校生、中学生にも伝えているのが、自分や地域の「たからもの」を見つけるということです。地域でふるさと学習をする機会も増えている中で、私は基本的に、自分のこと（自分資源）も分かりながら地域資源（地域の「たからもの」）も分かるような教育が必要だと思っています。下手をするといま、両方とも分からない教育になっている可能性もありますので、両方が分かるような教育をめざして、「じぶん資源とまち資源の見つけ方」というワークブックも作りました。

➢ 「神経衰弱」の逆イメージ

3～4 年前、北海道庁からシンポジウムに招かれて、「北海道の集落をどうしていくのか」というテーマで講演とパネルディスカッションを行ったのですが、その壇上で思いついたのが、「今の世の中はトランプゲームの“神経衰弱”のような状態ではないか」ということでした。トランプゲームの神経衰弱はカードを全部裏返して、1 人 2 回引くチャンスがありますが、同じ数字が出れば続けてまた 2 回引くことができます。いまの世は、カードが裏返っている状態ではないかと思うのです。それに対して、未来のイメージは逆です。カードをすべて表向きにし、それを自由に組み合わせ、何かを創造するイメージです。何とか日本の各地にある「たからもの」と人的資源の「たからもの」をすべて表向きにすることができないか、その組み合わせをつくれないかと考えています。

➢ A to Z の可能性

現在、私は「A to Z」という古典的な編集手法を使って表向きにする作業を行っています。AtoZ によって 8～9 割の表現が可能ではないかと思いますし、本質に迫ることができます。編集は素人でも簡単です。認知症前に「回想法」としても使える等、いろいろな使い方があります。いま、ひとや集落、地域など、細かい単位で「たからもの」の見える化を行っています。

例えば、「綾部市 A to Z」を見ますと、A は合気道発祥地、B は本(Book)で、綾部にはいくつも登場本があります。C はカムバック・サーモンで由良川には鮭が遡上しますし、D は出口王仁三郎と大本など、いろいろと挙げられています。マニアックなところでは、E のエスペラント語。綾部が日本に広める大きな役割をしました。これが綾部版 AtoZ です。

さらに小さな単位では、私が住んでいる自治会「鍛冶屋町」という 70 軒くらいの集落でつくった「自治会版 A to Z」があります。このよ

うに、かなり細かい単位で「たからもの」を可視化するという取り組みを行っているわけです。

最近では福知山市の旧三和町で、全校生徒 41 名の小さな中学校の生徒の方たちに「みわ A to Z」をつくってもらいました。私は、日本のすべての中学校でこのようなものをつくることを夢みています。

また、集落単位でも CD サイズの A to Z ミニブックをつくっています。京都府南丹市日吉町殿田は 100 軒ほど、中世木は 50 軒ほどの集落ですが、集落単位で 1 冊のミニブックを作成し、4 地区ありますので「4 部作」が誕生しました。私はすべての集落を A to Z でミニブック化するような時代をつくりたいと思っています。

A to Z の手法は冊子にしていますが、これは自己探求のようなものにも使えます。また、検索すると過去につくった作品を PDF で見られる「A toZ MAKERS」というサイトもありますので、またご覧いただければと思います。

まちが豊かになっていくためには、一人ひとりの市民のキーワード＝「自分 A to Z」が増えていくことが重要ではないかとか、いろいろなことを考えるようになり、今、「まち A to Z」×「自分 A to Z」を広める活動をしています。

● 世界を変える新しい組み合わせ

「人生 100 年」を生きるのはなかなか大変です。特に収入問題はもっと大きなテーマになるのではないかと思いますが、その中で希望はどこにあるか。脳科学者の茂木健一郎の本の中に、「世界を変える魔法は『組み合わせの中』にこそある」とありました。イノベーションの考え方と同じですが、とても重要なことではないかと思います。本日、初めてこの学会に出席させていただいて、話をさせていただいたのも新しい組み合わせだと思います。「農」と「天職」や「福祉」等、いろいろなものが組み合わせられていく社会をつくりたいと思っています。

➢ 既存の要素の新しい組み合わせ

目指しているのは福武財団の福武總一郎さんが言われる「あるものでないものをつくる」ことです。私も 50 数年生きてきたので、今後もあるものを活かしてないものをつくっていきたいと思います。

フェリシモ時代、芸大出身の同期や先輩が次々にアイデアを出していく様子に驚いて、いろいろな本を読み、行き着いたのがジェームス W.ヤングの『アイデアのつくり方』でした。既存の要素の新しい組み合わせをつくるということですが、これを大事にしていきたいと思っています。

➢ 先人知×若い感性、OLD＋OLD＝NEW

今までまちづくりを 20 年ほど行ってきた経験から「先人知×若い感性」というシンプルな掛け算の式をつくりました。若い感性だけでは弱いし、先人の知恵だけでは重いし、上手く活かされない、表現されないということで、この掛け算をいかにつくっていくかということが重要です。この話は、高校生や大学生にしても感じてもらえる部分です。

OLD＋OLD＝NEW（イアン・アトキンソン）という考え方もあるので、いろいろなもので新しい組み合わせをつくることが大事ではないかと思います。

➢ キーワードの掛け算／フィールド

分母は活動場所、フィールドで、分子には 3 つのキーワードを掛け合わせる掛け算をつくりました。私の場合、「半農半 X」×「コンセプトメイク」×「里山センス・オブ・ワンダー」が分子で、分母（フィールド）は綾部・福知山となります。今、日本の人口は約 1 億 2,600 万人。たくさん人がいても、これと同じ内容の掛け算を持った人はきっといません。全国でこのワークショップをおこなうのですが、キーワードは1つくらい重なるかもしれませんが、2つ、3 つ重なる人は過去にあまり会ったことはない。

やはり人は多様です。私はこのことを「使命多様性」と呼んでいます。このような 3 つの掛け算と場所を組み合わせれば、人は多様であることも見えてきました。

➢ **３つの掛け算**

リクルートの藤原和博さんの考え方だと思いますが、20～30 代で 1 万時間かけた分野 A というキーワード×30～40 代で 1 万時間かけた分野 B というキーワード×50 代以降で 1 万時間かけた分野Cのキーワードという掛け算をすれば、オンリーワンになるという考え方があるます。私の場合で例えますと、20～30 代は「半農半 X」を中心にやってきました。それは今も続いています。そして、30～40 代はまちづくりで、これも今も続いています。50 代に入ってアート的なことも絡めながらやっていきたいと思っています。このようにやっていくと、人生 100 年が怖くなくなるというわけではありませんが、何か可能性があるのではないかと思われます。

➢ **アイデアは交差点から生まれる**

今、私が住んでいる綾部も段々と店が閉店したりしています。人と人が交わる場、交差点が減っている状況です。それでも組み合わせ、また掛け算によってアイデアが生まれる交差点を、どのようにつくっていくかということが、とても大きなテーマとなっています。

私が住んでいるところはとても田舎ですが、それでもどこか 1 部でも世界最先端のまちをつくっていきたいと考えています。それがどこなのかはまだ分かりませんし、この後どのくらい生きられるかも分かりませんが、探求を続けたいと思っています。

● 最後に

＜「X」フォト・コレクション＞

最後に付録ですが、半農半X提唱の私は職業病とでもいうべき、何を見ても「X」に見えてしまいます。それを写真に撮っています。それを最後に紹介します。

1 枚目の写真ですが、友だちに軽トラを貸したところ、荷台のシートを留めているゴムが「X」の形になって返ってきたので、すぐに写真を撮りました。このような写真ばかりを撮っているので、家内にはいつも怒られています。

2 枚目の写真は、台湾へ行った際は、「X」の模様の石が海岸にたくさんありました。そのような自然のデザインは大変好きです。

来週、寺で草刈りがありますが、その寺のすぐ下に、見事な「X」の形の枝ぶりの木がありました（3 枚目の写真）。私は自然からインスピレーションを得たいと思っていますし、自然はやはりデザイナーだと思います。

4 枚目は蜘蛛の写真。人間だけでなく、蜘蛛も「X」を持って生きています。5 枚目は雪の中の枯草が「X」の形になった写真です。そういう何もないような風景の中でも、何か美を探すことができればと思っています。

エックスフォトと呼んでいますが、今、2,000 枚くらいあり、少しずつ増えています。Facebook で公開中ですが、目標は 10,000 枚です。人生 100 年であと 50 年かければ 10,000 枚撮れるかも知れませんが、同じような写真も増えてきたので、歩いての旅に出れば撮れるかも知れません。このような写真も、10,000 枚撮ればその道の第一人者になれるかも知れませんし、今までも「写真展をしませんか」という声掛けもありました。例えば、芸術家の横尾忠則は「Y 字路」だけをフォーカスしたり、滝をフォーカスしたりされましたが、何かを突き詰めていけば、また未来も見えてくるのではないかと思っています。

＜センス・オブ・ワンダー＞

私が最も重要だと考えているのが、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー（sense of wonder）」ということばです。これは 50 年

前のことばで、「自然の神秘さや不思議さに目をみはる感性」と訳されます。センス・オブ・ワンダーを子どもは持って生まれますが、大人になるとなくしてしまう。周囲の大人はなくさないようにそれを守ってあげてほしいという願いです。最も重要な力を１つだけ選べと言われれば、私ならこのセンス・オブ・ワンダーを選びます。このようなものを大事にしながら、人生100年時代のライフスタイルを構築できればと思っています。

＜「１人１研究所」の発想に至った経緯＞

余談ですが、「1 人 1 研究所」の考えに至ったきっかけがありました。私の家内は山口県下関の出身ですが、里帰りをしてまちを歩いていると、たまたま「腹話術研究所」という看板が出ていたのです。定年退職した人が独学で腹話術を習得し、週末は無料で披露する等、周囲の人々に喜ばれているのでは、と想像しました。その辺りから「〇〇研究所」という個人の研究所に関心を持つようになり、「研究所の研究所」をつくるようになりました。

舞鶴を車で走っていると「卓球研究所」という看板も見かけました。いろいろな研究所を見ていく中で気づいたのは、心理系でも、福祉系のまちづくりでもどんなテーマでも、結局は「人間とは何か」とか「宇宙とは何か」に行き着くのではないかということです。他にも、兵庫県には「ハンザキ研究所」というオオサンショウウオの研究所がありますし、広島県には「ツキノワグマ研究所」という NPO があります。恐らくそれぞれが「人間とは何か」「宇宙とは何か」という問いに立ち返って、いろいろな角度から考えていると思われますし、そのテーマの多様性、使命多様性はとても重要ではないかと思います。

この「1 人 1 研究所」を中国で講演した時、中国人にもストレートに分かると言ってもらえました。私は「半農半 X」と同じように、１人１研究所のコンセプトは輸出可能だと考えています。本日の話は以上です。皆さんにとってインスピレーションの種となるものを何か１つでも提供できたなら幸いです。

本日はどうもありがとうございました。